



（大学は専門学校を競争相手として直視せよ）

教養教育は大学の優位性なのか？

2010年度に54.3%だった大学・短大進学率は、2014年度に53.9%と、4年間で0.4ポイント下がった。一方、専門学校への進学率は15.9%から17.0%と1.1ポイント上昇。大学関係者の中には、「この間の景気の低迷が家計に影響して受験生が専門学校を選んでいただけ」と分析し、専門学校を本来の競争相手とみなさない者も多いと思われる。

元来、大学関係者は専門学校を自学より一段下に見がちだ。教養教育、アカデミズムこそが大学の優位性だと言う教員が多い。では、果たしてどれほどの教員が、自学の教養教育の中身に胸を張れるだろうか。

閉鎖的で頭でっかちのアカデミズムはむしろ、社会との間に高い壁をつくり、目の前にいる学生の教育をないがしろにする方便になってきたのではないか。多くの大学は目の色を変えてアクティブラーニングに力を入れ出したが、実践的教育という看板の下でずっとそれを行い、学生に力を付けてきたのが専門学校だと言えるだろう。

専門学校の新制度が受験生に与える期待

今、専門学校は大学の最も弱い部分に挑む形で新しいポジションを得ようとしている。2014年度にできた職業実践専門課程がそれだ。それぞれの専門分野の出口となる産業界や関係業界と連携し、カリキュラムの編成、教授法向上、実習や研修の実施などに全面的な支援を得るしくみをつくる。さらに、

カリキュラムや授業について連携先から評価を受け、改善につなげる。

こうした連携が形式にとどまらないことを確認したうえで、文部科学省が課程認定をする。初年度は約500校、約1400学科が認定を受けた。産業界から必要な人材像を直接聞き出しながら一緒に教育をデザインし、実践し、修正を加える専門学校に文科省がお墨付きを与える。そこで学べばよそに比べて就職しやすいに違いないと、受験生や保護者、高校教員は期待する。それを横目に、大学はいつまで、「うちは就職予備校ではない」と強がっていられるだろうか？

教養やグローバル教育で大学に対抗する動きも

手前味噌の話になって申し訳ないが、2014年度から私が学長を務めているインテリアデザインの学校を例に、大学との競争を意識した専門学校の改革の一端を紹介する。1999年にイギリスのある大学の関係者が日本の大学、専門学校を視察し、本校を提携先としてふさわしいと判断した。現在、ダブ

ルディグリーを導入し、互いの教育内容を高めるため、テレビ会議で真剣な議論をしている。2015年4月の共同大学院設置をめざす検討も進んでいる。

また、豊かな教養が必要なのは専門学校の卒業生も同じだと考え、本校では教養教育に力を入れ始めている。先日、早稲田大学の協力を得て学内の演劇博物館を見学し、館長から演劇史の講義を受けてきた。もちろん、職業実践専門課程についても次年度の認定をめざし、準備を進めている。

専門学校も一部の大学と同様、オーナー型で体質の古い学校が少なくない。教職員の提案がつぶされるというケースも見聞きする。しかし、教育機関としての使命感、市場の厳しさを直視するまっとうな危機感を持つことができれば、組織が小さい分、大学に比べて改革は速いと思われる。

大学と専門学校が切磋琢磨してそれぞれの教育をより良いものにし、結果として若者の選択肢が広がり、素晴らしい教育を受けた人材によって社会が豊かになる。そのために、大学はライバルの動きを直視すべきだ（談）。



制作：長澤素子